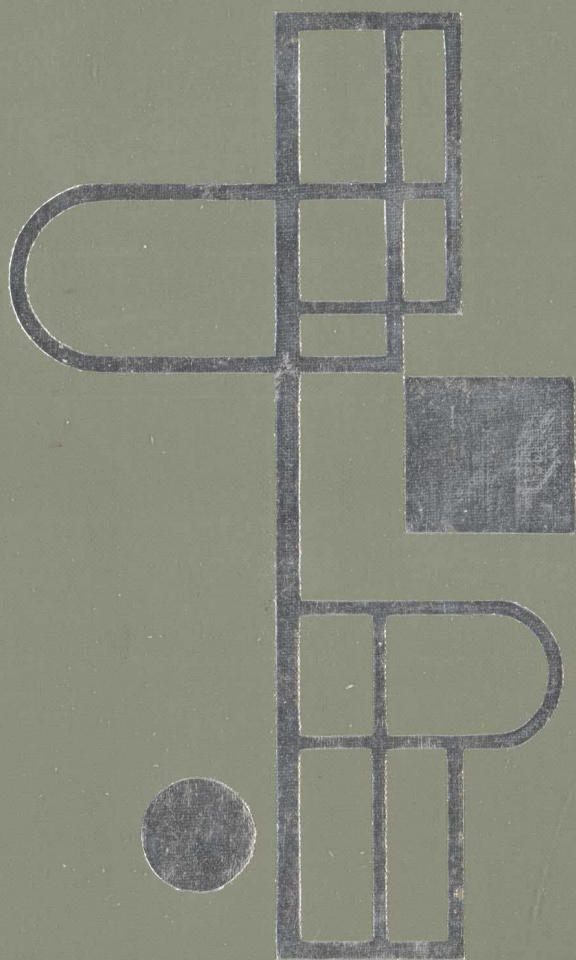
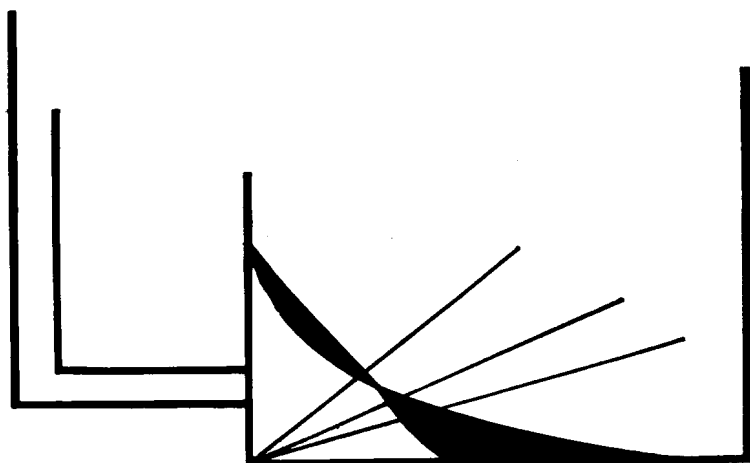




中野重治 集

新選 現代日本文學全集

7



筑摩書房版

新選 現代日本文學全集 7



中野重治集

昭和三十五年八月二十五日 発行

著者 中野重治なかのしげはる

発行者 古田晁東京都千代田区神田小川町二ノ八

印刷者 山田一雄東京都青梅市根ヶ布三八五

発行者 筑摩書房東京都千代田区神田小川町二ノ八

〔電話〕東京元局 四七六五一（代表）
振替 東京 一六五七六八

製印整 版株式会社 精興社
刷株式会社 精興社
本株式会社 矢島製本所

中野重治集 目次

むらぎも……………	五	軒さき……………	二五
おどる男……………	一四	萩のもんかきや……………	二三
軍 楽……………	一四	日暮れて……………	二八
夜と日の暮れ……………	一五	ある樂しさ……………	二四
樟脳と新かな……………	一七	事実と解釈……………	二五
男いとこ……………	一八	冬に入る……………	三〇
米配給所は残るか……………	一七	露伴のこと……………	三〇
秋の一夜……………	一八	伊丹万作について……………	三一
広 重……………	一五	過去の作家・作品の新しく よびかけるもの……………	三六
司書の死……………	二〇	「くれなる」について……………	三三
公正への誘惑……………	二六	朝鮮の細菌戦について……………	三五
荒れた屋敷……………	二三	評論家の文体……………	三四
孫とおば……………	三七		

久保山さんの死をかなしむ……………	三二
大塚甲山の墓……………	三四
宮本百合子の戦時中の 社会評論について……………	三五
雄弁調と美文調とに反対のもの……………	三六
ある側面……………	三六
モスクワの作家大会と ソ連のあちこち……………	三七
小さい人、瘦せた人……………	三八
女のこと……………	三八
へちま・くちなし・えぞすみれ……………	三五
ある古本の運命……………	三六
わきで見た思い出……………	三九

一つの生涯……………	三九
第二『文学界』・『日本浪漫派』 などについて……………	三九
芸術家の立場……………	四〇
身分、階級と自我……………	四〇
中野重治論……………	四六
解説……………	四三

装幀 恩地孝四郎
恩地邦郎

中野重治集

「家庭教師か。どんな奴が出てくるんだらう……でも、妙なもんだなア。へんだなア、代理の家庭教師なんても……」

谷中清水町の合宿から、藍染橋の谷間へ一たん降りて、根津八重垣町から本郷台へとぼつてきながら、これから出かけて行く追分合宿での仕事のことを、何か照れた気持ちで安吉は頭に浮かべた。

ここいらは三年まえの地震火事をまぬかれて、中古のカビの生えた、しかし中等の品といった表情でのこつている。焼けた大学に向きあつて、電車のすぐ反対側に町屋並みが残る、そのうしろに、白山から春日町へ行く電車みちを高めから見おろして、丸山町へん一帯が、大きな樹木の群をいくつもかかえこんで、人が冠りものをしたような姿で残っている。灰色とみどり色とのその下には、旧小名で男爵だのというものの、その成れのはてのようなもの、役人のようなもの、大学教授のようなもの、ちよつとした勤め人といったものが住んでいて、蔭の多い通りを

歩きながら、ひよいと、活字で知つた学者の名を表札に見つけた安吉が、「お、こんなとこに、こんなつつましさで住んでるのだなア……」と思つたこともあつたが、いま歩いて行くのは、その樹木でこんもりとした区域ではない。その手前の、大学にいつそう近い、電車通りにくつついた町屋の区域で、これという目じるしのない路地を裏へはいつた、粗末でぶあいそなシモタヤの一軒というところだつた。

昼めしを過ぎた時刻で、人通りはどれほどにもない。今あるいて行く当の追分の区域、そのうしろの丸山町の区域、そのもう一つ向うに、指ヶ谷町、八千代町、柳町へんの貧しい窪地区域のあるのをこの安吉は知つている。清水町と伝通院との往きかえりに、その窪地の、狭い、うねうねした、ほこりの溜まつた通りを幾度か通つてもいた。ただ彼は、そこを、路地をひろつて、近道として通りぬけたのに過ぎなかつた。足ばやに通りぬけながら、彼には、その一帯に楽しさが見られなかつた。かえつて、その窪地がもう一度高まつて、小石川植物園をのせたあたり、そのへんに一種の楽しさが見だせていた。彼の暮している清水町の合宿、それを入れて上野公園へとつづくその高台、それから大学の第三の高台、この三つの高台と、それに挟まれた八重垣町の窪地、指ヶ谷町、八千代町の窪地の二つの窪地とが、自分の心理に不安定な混雑をあたえているのを安吉自身感じていた。

三つの高台にも生活があり、二つの窪地にも生活があつた。高台の方の生活には一種の合理性があり、窪地の方の生活には一種の不合理性があつた。この合理性には小ブルジョア的なところがあり、不合理性の方にはプロレタリア的なところがあつた。今では安吉に、ちんまりしたこの合理性が生理的にいやになつてゐる。そこから、生活を、ひき抜いてしまいたい。しかし抜けない。それをそこに置いておくかぎり、過去からきて安心させるあるものがそこにある。彼は生活を、窪地の、乱雑な不合理性の方へ植えかえてしまいたい。しかしできない。植えかえる場合、何がどうなるうがという、未来からくる不安な何かがそこにあつた。ただ、その匂いのようなものが彼を引く。しかし今は、指ヶ谷町窪地は頭から消えていた。彼は、かれらにだけ一と目でわかる目じるしで路地へまがりこんで合宿の玄関をあけた。

「いらつしやい……」といつて藤堂の妹がでてきた。この合宿は、借り手の名藤堂で前から借りていて、ついこの頃から、金沢から出てきた藤堂の妹が飯つくりをしてやつてゐる。

「もう見えていらつしやいます。」

その言い方、東京言葉に馴れようとして力めてゐる調子が、やはり今日も、仕合せな人にどこまでもついてまわる不幸という考えを安吉に刺戟した。瘦せて背のたかい兄にたいして、ふとつて背の低い丸い妹。顔色があかくて目の大きい兄にたいして、顔色があかくて目の小さい

妹。しようことなし相手のためにほほえむといった兄にたいして、太つたからだのなかに震源のようなものを持つた、ぶるんぶるん震えの止まぬゴム棒が何かのような妹。そしてその兄の方が、生活にたいして、将来にかけてねばり強いものを持つていような気が安吉にする。健康でくつたくなげな妹の方に、こういう娘を搞きくだいてしまわずにはおかぬ不幸が待ちうけているように安吉に思えてならぬ……

「こつちですネ？」といつて安吉は勝手に食堂のとなりの部屋にはいつた。

「……………」

そこに横坐りしていた青年が、何か聞きとれぬことをいつて坐りなおしながら安吉に会釈した。青年は細長い指をして、膝のわきの灰皿で、無意識にゴールデンバットをもみ消している。「僕が太田の代りです。」といつて安吉も会釈した、「さつそく始めますか？」

しかし安吉は、その青年の、栄養の行きわたつた蒼じろさといつた顔色を目に入れたなり、いきなり非常な速さで昨日のことを思いだして

いた。

昨日の昼めしすぎ、安吉は二階の机のわきでぼやつとして横になつてた。彼のなかで、自分というものが正当に認められたときの嬉しさといつたようなものと、不当に否定された時の無念さといつたようなものが入りまじつて、それは、自分にとつては問題と思えるあること

が、まわりの仲間には全然問題でないらしいこととからくる一種の淋しさでもあつた。

そのとき合宿には誰もいなかった。小さな騒ぎをしては昼めしをくつた連中は、そのあと二十分ほどだがやがや喋つていたかと思うと、みなそれぞれの恰好で、教室へ出るなり、産業労働調査所へ出かけるなり、わきの大学や研究会へ出むくなり、安吉の知らない、安吉などのタッチしてない方面へ出かけるなりしてしまつて、しんとした清水町の合宿全体に、安吉のほかにはおばさん一人しか残つていないことが気配としても安吉を包んでいた。そのおばさんにしても、片づけものをしたあと、自分の部屋へひつこんで、京都からきた手紙を皺をのばすようにして読みかえしながら、溜息をついたり、不安がつたり、子供のように笑つたり一人で行っているか何かだろう。その佐伯哲夫に、月に二度ほどずつ本の差入れをするのが、哲夫の逮捕以来の安吉の仕事にもなつてゐる。哲夫本人が、本は片口に頼めと母あてに書いてきて、それが安吉にもみんなにも自然に受けとられてそうなつてゐるのだつたが、いつか母親が、安吉が京都刑務所上京区支所といちいち宛名に入れるのを心配して、口に出してそれをいつたこともあつた。持つて行く安吉を、局でいやな目で見はしまいかというのが母親の懸念だつたけれど、番地で届くのを承知のまま、刑務所あてということを知られたくない人のための、役所風なおめぐみ式便宜の意義も十分みとめたまま、しかし

安吉は、母一人子一人の哲夫おやこのため、自分らは哲夫たちを支持するものだということを上べにまで表明したいために、包みの桐油紙にかならず上京区支所内と入れないでは気がすまなかつた。追分局のわかい係りは、いつも宛名をてんで無頓着にカーボン紙へうつして受取りをよこしたが、安吉はそれが、百も承知の上のことか、治安維持法の存在さえ知らぬためのことか、どうやらあとの方に思えたけれども見当はつかなかつた。そんなことから、合宿の人間としては新顔でありながら、安吉とおばさんとのあいだには、ほかの学生とはいくらか違つた点での親しさも生まれてゐる。

しかしごろつとして寝そべつてゐる今の安吉の気持ちは、おばさんにそのことで話してみても、始まる性質のものではなかつた。安吉たちは、おばさんを合宿のおばさんとして大事にしていた。彼女は彼女で、一心になつてこさえたキャベツ巻きなどが、うまいうまいといつて食われるのを目にみえて仕合せそうに眺めてゐる。しかし彼女の上に、合宿の一員でもあつた息子や京都へ連れて行かれてからあと、息子のいた時分には見られなかつた別の生活がちらりと姿を見せることのあるのに安吉は気づいてゐた。独り合点かとも思われたが、元気のいい大学生たち、その賑やかな笑い声が、かれらの出はらつたあと、息子につながつて、網をたぐるようになつた母親の胸に集まつてくるさまが何かの時安吉に思われる。ほかの連中にしても、気づいてゐる

にはちがいなかつたが、ただそのことを口に出しては誰もいつていなかつた。

「ちよつとはいつてもいいか？」

お互いの部屋へはひと声かけてはいつて行くことができたが、いくら奥まつたお婆さんの部屋へは、用事もなかつたがそれはできなかった。田舎風の家具のようなものがそこにあり、衣類用のつづらのようなものも片隅に置いてある。茶ぶ台の上へ封緘はがきを持つてきて書いていたお婆さんが、何かにひつかつたらしく途中で書きやめて、封緘と鉛筆を持つて隠れるようにしてはいつて行く暗いめの彼女の部屋……そのお婆さんの姿も、寝そべっている今の安吉からは遠かつた。

ついさつき、まだ安吉がもぐもぐ口を動かしているところへ、さきにすました秀才の内垣が本をかかえてやつてきてふいに質問した。

「片口君、ちよつといいですか？」と彼ははいねいな口をきいた。彼のていねいさはさつぱりしていて、ねばつこいていねいさに弱い安吉にはいつも助かつた。

「叛乱は芸術ですか？」と彼はいきなりいつた、
「叛乱は芸術だとエンゲルスがいつてるそうですが、芸術ですか？ どういう意味で芸術なんですか？」

頬ばつたまま安吉にはてんでわからなかつた。

「わかりませんネ。わからない……」

「山添君はネ、芸術といつてもそれや技術のことだろうつていうんですがネ。技術かなア？」

技術ですかねエ？」

「技術じやアないでしょうネ。」何の根拠もない安吉にも、そう思われることは確かにそう思われた。

「どつちかといえアやつぱり芸術でしょう。」
「やつぱり芸術ですか……どうして芸術なんですか？」

やはりそれは、新人会へはいるまでは経験したこととなかつた、合宿へはいつてはじめて日常生活として経験するようになったいつもの問われ方だつた。安吉との関係では、特に内垣にこの問い方が目立つた。安吉にそれは快感のよなものでもあつた。

いつたい安吉は、大学へはいつてまもなく新人会という団体のあるのを知つた。高等学校でいつしよだつた連中でそこへはいつていっているものがあり、安吉にもしきりにはいれとすすめていたが、二年ほどもぐずついていた揚句、このごろになつて、これという自覚したきつかけもなしにふらふらとそこへはいつたのは、彼の場合、直接のきつかけがむしろ感覚的なものであつた。太田に誘われて出てみた二つほどの研究会で、あつまつた連中は、安吉を、感覚的に——と安吉は受かつた。——平等にあつかつた。かれらが今ぶつかつていちばんに困っている問題、安吉には見当もつかぬ問題について、かれらはかれらと同じ水準での安吉の意見と解釈とを求めた。かれらは、日本労働組合評議會を愛して日本労働組合総同盟にくんで

いた。しかし安吉には、その二つがどうちがつているのかでんでわかつていなかつた。かれらは、共産主義者を愛して社会民主主義者にくんでいた。この二つがどうちがうのかもてんで安吉は知らなかつた。第一彼はそれらの定義を知つていなかつた。そのことがかれらに知れわたつても、「お前、そんなことも知らぬのか！」という顔をするものが誰もいなかつた。

「かれらは求めているのだ。試しているのじやない。試すということを知らぬのだ。」という感じで安吉も当てずっぽうを答えることができた。どうかすると、事がらを知らぬための安吉の当てずっぽうがかえつてあたつていることがあつた。するとそれをかれらが採用した。安吉は小さな晴れがましさを感じた。そしてシャワーをあびたような、感覚が清潔にされて引きあげられるような初めての経験をした。彼は新人会にはいり、研究会に会員として出るようになった。研究会はいくつかの班にわかれていた。そして、どの班も、共通にスターリンの『戦略と戦術』というパンフレットをやつていた。安吉は編入試験ではいつてきた生徒のようなまごつき方で、割りあてられた章を読んだ。革命に「段階」があるとは！ 革命に「予備軍」があるとは！

「……この活動にもとづいての闘争展開を決定しなかつたならば、前衛は労働者階級から切りはなされ、労働者階級は大衆との結びつきを失つたことであつただろう。国会時代の大衆の経

驗がなかつたならば、カデットの暴露とプロレタリアートのヘゲモニーとは不可能であつただらう。」

ヘゲモニーというのは何のことだらう？ カデットというのは何のことだらう？ 松本たちと酒をのみみしてゐるうちに、めばしいものをとのかためずつ売つてきてしまつて、申しわけばかりに残つてゐる安吉のボケット字引には *badest* という言葉がのつていなかつた。

「召還主義の戦術の危険は、この戦術が、前衛を幾百万の予備軍から切りはなす恐れのある点にあつた。」

召還主義というのは何だらう？

「メンシエヴィキとエス・エルとが、戦争と帝国主義との味方だという正体をまだ暴露しきつておらず……」

メンシエヴィキというのはどうやら見當がついた。しかしエス・エルというのは何だらう？ なに？ なに？

「党全体の計画的活動と、労働者階級の闘争の指導とが、これらの原則を實行せずには不可能なことは、論証するまでもなからう。組織問題におけるレーニン主義は、これらの原則を斷乎として實行することである。これらの原則に反對する争いを、レーニンは、わらうべく投げすてるべき『ロシヤ風ニヒリズム』『貴族的無政府主義』と呼んでゐた……」

してみると、彼の愛読した「蒼い馬」の主人公や作者なんかは、「わらうべく投げすてるべ

き」ものなのか？

安吉のまごついたのはそんなことでの無知でだけではなかつた。ときどき酒をのまずにいられぬことが彼をいつそうまごつかせた。合宿の連中は一人として酒をのまなかつた。佐伯哲夫は一人だけ飲んでゐただらう。しかし今は、彼は独房で煙草も吸わずにゐるにちがいない。安吉はこそこそと隠れてのんだ。しかしある日、やはり内垣が、そのときも何かの本をかかえたりで安吉に訊いた。

「片口君、酒はほんとにうまいですか？」

「うまいです。」と安吉はしうことなしに答えた。

「どんな風にうまいんです？」

内垣には、酒がうまくて飲むという人間が、不思議な習性をもつた何かの動物のように——

しかしその習性が別に人に害はあたえない。——不思議に見えるらしかつた。内垣の澄んだ目を見てみると、酒をのむこと、むしろ酒が好きだ、うまいということがすでに下等なことのよう

に安吉に感じられた。今では安吉にも、のまづにすることがそれほど苦痛ではない。真面目な話にかぎつてシラフでは切りだせなかつた松本や鶴来とも、このごろは酒なしに真面目な話ができるようになった。そして十日か二週間、すこしも飲まずにいて、それを取りかえずほど大酒をのんで、後悔と卑下とで吐きそうになつてこそこそと夜おそく合宿の玄関をあけるのだつた。

内垣が今かかえてゐる大判の本は、芸術だとか技術だとかいうことの書いてあるその本ではなかつた。たどたどしい、但書きのよくつまつたような安吉の解釈を、「はア……はア……」といつて聞いている内垣が、安吉には氣の毒をしてゐるようで重荷だつた。安吉はもつといくつも但書きをつけねばならなかつた。「つまりどうですか？」といつて、開けた本の頁へ指を入れて、「技術」というのは手書きですね。ろへまわした。「技術」というのは手書きですね。はじめにプランができて、それを具体化する順序がきまつて、それをその通り順々に運んで行けばいい。第一のつぎに第二をやればいい。第一ができたからといつて、第二が第二でなくなるというのではない。すなわちあらかじめ決定されてゐることが肉づけられるだけだ。芸術はこれと異なる。プランはある。しかしそれが実現されはじめるや否や、それは新しいものをつくりだす。いちおう第一段、第二段とありはするが、それは予定の終了という形をとらない。その点で手続き実現の性格が異なる。第一段の実現があたらしい条件となつて、ある程度予見されてゐた第二段が第二段でありえなくなり、全く異なつた第二段があらわれざるをえなくなることがある。このものは、第一段の實行によつてのみ現実の条件となる。この實行ということが芸術実現の手続きの性格だ。そこに動があり、創造がある。これが技術の静と異なる。叛乱があたかもそれだ。大略のイメージはある。し

かしそれが実現されはじめるや否や、予見されたものとはちがつたものが生まれうる。生まれうるというよりは、すなわち可能というよりは、むしろその方こそそこでは一般的だ。それは予見自身をも変革して行く。叛乱はかくて創造だ。それは芸術だ。こうですネ？」

「うむ。ま……」

「大分わかってくるぞ。どうもありがとう……」

それだけ幸福になつたといつた内垣の調子が安吉をも幸福にした。エンゲルスのいつたという元の言葉からはなれてしまつて、解釈だけ勝手に一人あるきしすぎた気がちりりとしたがそれは消えてしまつた。内垣が、人のいうことを楽しむようにして聞いていて、本人にも案外なへんまできれいにまとめてかえしてくれるのが小さい音楽をきくように安吉にはこころいい。いつたい新人会の連中には、これまでの安吉たちとちがつて、他人の話をしまいまで聞こうとする癖があつた。そのうち安吉は、それがレーニンの真似だということを知つたがやはり感心した。安吉の場合は、言葉がさきに飛びだしてしまふ。飛びだしてみると、それは、まだ形をなさぬ形で頭に浮かんだ、一瞬まえのものと違つてしまつてゐる。感情をまじえた表現になつて、思わぬところで相手を傷つけてしまふこともある。相手の話をじつと聞いていて、最後に決定的な自分の意見をいう——その真似にはキザつばい気取りもみられたが、それでもそん

な「心がけ」になれるところが、相手にみなまていわずにやつつけてしまふことに互いに快感を感じてきた今までの安吉たちの行き方よりもいいことのように見えた。しかし内垣にはその気取りがそもそもない。彼には、長者にして秀才なるものというところがあつた。安吉は二階へのぼつて、ささいな幸福感のなかで机の引出しからウコン木綿の小さい包みを取りだして膝の上にのせた。

あぐらの膝の上で安吉はその小風呂敷をといた。なから風色の古綿にくるんだものが出てきた。安吉は古綿をむいた。なから人形のようなものが出てきた。高さ四寸ばかりの蠟石をきざんだ坐像で、衣の襷などは窪み一本であらわしている。そのつやつやしたヤニ色のものを手の平にのせて、それをまわすようにして安吉はためつすがめつして眺めた。まわすにしたがつて、受け口の婆さんのような人間の表情がほんの少しずつ變つて見えてくる。のとどけたようなアルカイック風なほほえみが、言いようのない安らかな楽しみを安吉にあたえる。重さともいえないその重さを手の平に感じることに、内垣との話から受けた一種の幸福感の安吉のなかでの反響があつた。安吉はこれを父から貰つてゐた。朝鮮のどこかで、ある種の日本人が、古い朝鮮の墓をあばいたりして金目のものをうばい取つて、ガラクタと思われたものは二束三文で売りはらつた。そんな一つを買つて、併合後の朝鮮で小役人をしてゐた父が、女房子供か

らはなれて一人であちこちしてゐたあいだこれを離さずにいた。安吉の方でくれといつたわけではなかつたが、欲しければ持つて行けと父からいわれたとき、貰わねばならぬことが一ぺんにわかつた気がし、もともと欲しかつたことが自分にも一ぺんにわかつた気がして安吉はそれを父から受けとつた。石材がやわらかくてすぐに脆くかける。新人会にはいつたとき、これからどこでなくがたつくように思われて鶴来のところに預けたが、このごろできた鶴来の愛人が、それを見て「気味がわるい……」といつたと鶴来がいつた。気味はわるくない。気味のわるいのはむしろ——それがほしいのだが——あの爵だとか角だとか、何だか読めぬ字で名の書いてあるアヤメもわかぬ銅器などの方のやつだ。あすこまで行くと、ほんとうに気味がわるい。あいうものの方が、上か下かといえはつと上だろう。しかしこの方には、そんな底知れずがないかわりに気安さがある。気楽で平民的なたのしきがある。やみくもに見たくなつてついでにのあいだ鶴来のところから取つてきておいたのを今ひよいと取りだしたのであつたが、これ以外には、安吉はどんな意味でも美術品といえるものを持つてゐなかつた。姿形からくる美で楽しさをあたえるというものを持つてゐない。「しかしこんなものも楽しむの、あんまりいいことでもないな……」

すると安吉の頭に、内垣のいつた「叛乱」にむすびついて伊集院の鼻の高い顔が浮かんでき

た。

「何であいつは、ちよろちよろしたり逃げたりするんだろう？」

伊集院は、安吉の知るかぎり佐伯たちのグループの人物と見られていて、佐伯たちが逮捕されてしばらくした今もまだ逮捕されていないらしかった。一と月半ほど前、彼は大胆にも大学構内の研究会へ姿をあらわした。大衆活動としてのデモンストレーションのことがそのとき問題になっていたが、話がある点へきたとき、彼が上半身をテーブルへのしかけるようにして、のしかけるのにつれて声をひそめてこつそりというのを安吉は片隅から聞いた。

「……」な、問題は Aufstand にあるのだよ。将来における Aufstand であるのだよ。」

安吉には、問題の急所が、自分の無知からくるらしく感じられたが一言でわかつた気がした。同時に、滑稽で味気ない気もした。何でドイツ語なんか使うのだ？ 何で声をひそめたりなんぞするのだ？ 伊集院がいくら顔をつきだすようにしたところで、部屋は百人ぐらいいれるガランとした第二学生控所だ。誰もかれも、逮捕を逃げきつて伊集院に、彼が忽然としてここにあらわれたことから特別な気持ちに知らずしらずになつてゐるのだ。一座全部が、危険な伊集院と秘密をともしにしているという氣になつてゐる。伊集院の声の出し方には、はじめに発言される「叛乱」とか「蜂起」とかいうことが非合法なためか、彼の身柄そのものが非合

法なためか、どつちともわからぬところがあつた。鹿兒島人らしい雄弁がいつそうそのことを安吉に刺戟する。美丈夫といったタイプの伊集院が、ここで彼一人だけキノ・ハカマで出てきていることもそのことを安吉に刺戟する。「叛乱」だの「アウフシュタント」だのといつてみても、一度口に出してしまえば、秘密めいた影は——すくなくとも安吉には消えていた。

「いつたいどつちが本物なんだい？ 酒なんか飲む佐伯が手もなくつかまつて、ビュリタンくさい伊集院がつかまつていない。アナキーで身勝手なところある佐伯がつかまつて、理路整然とした伊集院がつかまつていない。数学の本が読みたいだの、うんと芸術的なものを入れろだのといつておふくろにせきたててくる佐伯と、維新の志士みたような白い顔をして、捕吏の目をくぐつてという恰好でひらりとやつてきて煽動的な話をする伊集院と……いつたいあれや、組織的に動いてるんかい？ 早くつかまりたくなつてるんじやないのかい？ 自然主義的というところなるナ。それだからかえつて伝染するんだ……」

安吉は瀬田を思いだした。

「奴は、そのつきあつた別の小研究会で、さつそく伊集院を売りして『問題は Aufstand にあるのです。』といつたんだからなア。FをSとまちがえて、二度も Aufstand といつた……秘密めかすほど伝染してくんだ。自然主義以前

だ……」

「しかしおれが案外そうでなくはないからナ……」と思つたところへ、いちばん奥の部屋から村山が出てきて「何だ、それ？」といつて安吉の手許を覗きこんだ。

村山の部屋はいちばん奥にあつた。廊下がないため、階段へ行くのに村山は安吉たちの部屋を横切らねばならない。それを氣の毒がつて、彼は便所へ下りるのさへ節約するといつた男だつた。彼は全国の高等学校との連絡を受けもつていて、毎夜おそくまでせつせと手紙を書いてゐる。いつか安吉は、彼につれられて朝早く京都大学からの連絡者を迎えに東京駅へ行つたことがあつた。市電を降りた途端に、先の見えぬほどの大勢の人間が歩いてくるのが安吉の目にはいつた。行列とも、かたまりとも、いいようのない量でそれはやつてきた。安吉たちにはぶつかりそうになりながら、安吉たちには縫うにまかせて、人波そのものは傍目もふらずにどこにか向かつて押して行く。天に向かつて行くのか地に向かつて行くのかわからぬといつた陰気な勢いでそれは押してきた。

「何かデモンストレーションがあるのか？」と安吉は訊いた。

「デモンストレーション？」

ちらりと安吉を見た村山は、目をそむけるようにして「つとめ人だ。」と軽いつた。相手を困惑させまいという心づかいの調子が安吉に受けとられて、そんな風に庇護されることが安

吉には恥しかった。

その村山へ手の平のものを渡しながら、安吉は「土中ものだろう。」といった。

「土中ものつて何だ？」

「土の中にあつたものということだろうサ。ハニワともちがうけれど……」

前から安吉は、新人会の連中の芸術感覚にそれほど信用をおいていなかった。かれらのうちの文学好きが、このごろしきりにプロレタリア文学といつて騒いで安吉もそこに巻きこまれていくが、しかし彼には、彼とほかの連中とは、品物の受けとり方に確かにちがひがあると思われて仕方がない。安吉には、筋はともあれ、作の感覚がプロレタリア的なものでなければ承知できない。ただし彼も、どんなのがプロレタリア的な感覚かと訊かれれば、やはりほかの連中の真似をして、社会科学と心理学とをこねあわしたような言葉を並べる以外に説明はできなかったが、それでも頑固に、自分ひとり決めでそう呑みこんでいた。ほかの連中は、理窟の立つものの方を持ちあげて、つい安吉もなるほどと思うことがあるが、一人でいよいよとなればそれにはついて行けなかった。

そのうちに彼は、別のことにも気づいてきた。新人会のうちでも指導的な人間が——それはほんとに指導的な人間で、学問も深く、人間としても落着いて信頼できたが、案外に古い芸術感覚にひたりにこんでいる。なかには、キモノに角帯をしめて、それに片手指四本つつこんで歩

くのが気持ちいいというのなどさえもいた。このまえ、山添の兄貴の方が追分の合宿を出て、家を持つて、そこで特別研究会があつて安吉も呼ばれて行つたが、いかにも小じんまりとしてきれいな一戸建てで、その二階へあがると、一方の控え部屋に新しい洋服だんすが置いてあり、医科の方の本もまじつた中型の本箱には、安吉の大きな緑いろのカーテンがかかつていた。机が二つあるのは、一つは細君の方の勉強机だろうか？ そこに、ブルジョア的な安吉の考へる婦人雑誌が二冊きちんと揃えてのせてあり、何よりも、部屋にふくれた座布団が積んであつて、山添自身は別のひろい布団を敷き、あつまつてきた連中には積んである分を一枚ずつあてがつてくれたのが安吉をおどろかした。自分の育つた家、となり近所、親類、それから小学校、中学校、高等学校、大学ときて、こんな生活のなかにいたことは安吉には一度もなかった。偶然と知つていても、初めてだという方が先に安吉にきた。山添は対の羽織を着て、先が房になつた紐をしめて、まっ白いメリヤスの股引の足首を見せて、しぼりの兵児帯を巻いてにこにこしてあぐらをかいてゐる。家庭を持つたのだから、ああいう婦人雑誌のあるのも理窟としては受けとれる。しかしそれが氣にくわない。医科で医者になるのだとすれば、山添は家が金持ちなのだろうか？ そこへ細君が出てきて挨拶をしたが、いかにも昔ながらの若妻といった風情に見え、これがどこやらの専門学校で、そ

この社会科学研究会のチャキチャキだつたということが安吉にそぐわなく思われる。かえつてそこがおもしろいと考える余裕が安吉にはない。その細君が五六人に紅茶をいれてくれた。その茶碗が氣にくわない。いつか見た桃谷陶園の陳列にあつた方が、贅沢には贅沢でも——なるほどそれはそのままで矛盾だが——ずつとプロレタリア的だつたと安吉は思う。しかし山添の場合はいけすけだからまだいい。

「芸術的感覚だけはこつそり隠している奴があるからア……」

安吉は疑りぶかくなつてゐた。ただ安吉には、そんな連中が、酒などは飲まないで、それも無理に我慢で飲まぬのでなくて、規則正しく勉強家であるのが押えになつてかぶさつてきていた。「おれが古いのかも知れぬゾ。かれらは芸術的に低級だ。中途半端だ。でも、おれの方は、純粹に古いのかも知れぬゾ。」と思う。さりとて彼は、新しいものへも近づくことができなかった。太田などは、電車の定期券のようなものを持つていて、それでずつと築地小劇場へ通つてゐた。新人会でも幹部として動くようになってからは止めたらしいが、その小劇場へさえ安吉は一度も行つたことがない。安吉は、音楽を聞きに行きたいとほとんど生理的に思うことがあつた。すると、そこへあつまつてくる青年男女の姿が思いやうかんできて元氣がにぶつてしまふ。安吉の頭のなかで、噴水が十も二十も並んでふき上がつてくるような感覚でビヤノが連れて鳴

る。安吉は輾転反側して腰をあげることができない。

いま安吉に、「かえつて村山なんか……」という気がちよつとした。理由というほどのものはなかつたが、村山に犬儒派的なところのあるのが、逆に安吉に、村山にほんとの理解力を予期させるもののように思わせたのだつた。

仙台の高等学校からきた島田が、去年の夏この合宿にいた。安吉はまだ新人会にはいつていなくて、ただプロレタリア文学のことで佐伯を訪ねてきたのだつたから、島田の名も村山の名もむろん知らなかつた。佐伯との話が一段落して、安吉を送りだして佐伯が茶の間へはいつてきたとき、連中がそこらを濡らして西瓜を食っているところへ安吉はぶつかつた。

「佐伯、ほら、食え。」と誰かがいつて、見知らぬ安吉にも皿を押してよこした。

「仙台から出てきたといつてるんだから、もすこし待つてろといつてくれてもいいじゃないですか？」

西瓜を、胸のところに両手で支えるようにして、一人の恐ろしく鼻の高い青年が、一人の色の黒い青年に詰るような口調でいつているのが安吉の目にはいつた。

「だつて君、何も君から話してなかつたじやないか？」

「話してなくつたつてですネ、本人がそういつてるんだし、第一ようすを見ればわかるでしょう？ 女だつていつたつて姪ですよ。」

「よし。わかつた。手落ちは認めるよ。しかしおれはまちがつてはいなかつたゾ。」

そういつて、まだ不服そうな相手を見ると、「何だ？ 鼻がつつかえて西瓜がかみつつけねえじゃねえか……」と色の黒い方がいつた。

「……………」

鼻の高い方は、見知らぬ安吉の方をちらつと見て苦笑いした。その色の黒い方が村山だつた。

去年暮れのある土曜日——安吉はもう合宿にはいつていた。——今日は晩めしのあとで私生活批判会をやるという申合せが出た。小さくなつて安吉は批評をきいた。それがすむとお茶をいれて菓子を食べることになり、お互いの弱点を指摘しあつたあとの空気の、ぎごちないものの残つたのをなでつけるといつた気味で今度はお互いの容貌、体格のことが問題になつた。またそのときは、その後二三人変動はあつたが、揃いも揃つて美男がこの合宿にあつまつていた。私生活批判がすんでほつとした安吉は、それとは違つた不安でもう一度ちいさくなるほはなかつた。彼は、連中が諧謔まじりに欠点をほじくりあつてゐるのを聞いていて苦しかつた。言葉の辛辣さが、かれらめいめいの容貌の自信の上に立つてゐるように安吉には取れた。品さだめはだんだんに近づいてきて安吉にきた。

「片口か……」みんなが黙つたなかで村山がいつて、物の目方を秤ではかつて目を読むといつた調子で彼は低い声を出した、「お前は美男ではないが、好男子だよ。」

安吉はほつとして助かつた気がした。その村山がしやがんで覗きこんでゐる。みんな同様、この村山にしても出かけるところなのだろう。女子大学というようなところへ出かけて行つたものもあるはずだ。安吉はまだどこの労働組合へも結びつけられていない……

「悪趣味だなア……」という声が安吉の耳のハタでした。

一瞬安吉にはそれが何のことだかわからなかつた。自分に無関係のことが呟かれたような気で安吉はその発音を聞いた。朝鮮人形が彼の手の平へ戻つた。腰を伸ばした村山がそのまま階段へかかつてトントんと降りて行く。ぼんの窪の溝になつた頭が踊り場越しに消える。そのときになつて安吉には呑みこめた。彼は、顔色を蒼ぐろくしてごろんと横になつた。ごろんだ……恨みようなない。しかし「悪趣味」？ くそつ！ 酒を飲むことをどれほどひどくいわたのよりもそれは安吉に残酷にひびいた。悪気なしに、だからそれだけ残酷に、肉体全体が否定されたような気持ちで彼はまいつた。安吉には、村山の評があたつてゐるとはどうしても思えない。しかしみんなが、それぞれ、仕事を持つて、出かけて出はらつてゐることに結びついてそれがこたえてくる。村山は、やはり正確に秤の目を読むときの調子でそれをいつていた。鶴来なんか話したら何というだろう？ 安吉の存在の仕方そのものをおかしがるだろう。深江なんかはどんなに苦笑いするだろう？ いつたいあ

のマルクス主義芸術会の連中は、その一人である安吉などちがつて、ハウゼンシュタインのなかのエロチックな画などを、ただの説明図としてだけ見ているのだろうか？ 鉱物学教科書のなかの、方解石の割れ目模図が何かのように見えているのだろうか？

そこへまたトントンと音がして、「あ、村山が戻つたのではないナ……」と思つたところへ太田が顔を出した。この階段のトントンという音が安吉には気に入っている。足で踏んで、階段の板がみじんも彎曲しないという感じがちやんとくる。ある日安吉がためしに、階段を昇りながら横の壁を叩いてみた。するとチン……という音でそれが鳴つた。それは、壁自身の音ではありえなかつたから、壁と階段とで囲まれた立体のなかの空氣の筒と、この家の構造、材木の組合せとからくるものにちがひなかつたが、なにしろ、焼物を叩いたときのような音は——それが壁で鳴ることで——東京生活のなかで安吉に思ひもかけぬ拾ひものだつた。

「ほら……」といつて安吉はある日太田に叩いてみせた。太田はここでいちばんそんなことに興味を持つてゐる。

「ほんとだネ……」

太田は認めて、しかし壁にはさわろうともしないでトントンと降りて行つてしまつた。今では安吉は、階段の昇り降りに、トントンと板を踏みながら、手の平をいろいろにして壁を連打して音をきくのを楽しみにしている。誰も文句

はいわない。

「おい、片口……」と太田は上り口へ顔を出すなり安吉を見つけていつた。

「何だ？」

「君、あした午後、暇ないか？」

「あした午後か？ 新人会の新入生歓迎会だけだナ。」

「あれア三時からだろう？ じゃ一つ頼まれてくれんかナ？……」といつて太田はにやりとした。

「何だい？ 頼まれるよ。」

「家庭教師だよ。いや、出かけなくつていいんだ。むこうからくるんだよ。追分の合宿へくるんだ。一時から二時まで一時間、代りに見てくれないか？」

「だけど何をやるんだい？」

「ドイツ語だ。」

「ドイツ語か？ それやちよつと……」

しかし安吉は、ドイツ語というのでたじたとつたよりも、太田が家庭教師などやつてゐることがよくわからなかつた。太田と安吉とは同じ高等学校からきていた。高等学校で太田はテニスの選手をしていた。学校の成績もよく、明るい性質で腹をたてたりすることがなかつたが、ある日太田の写真帳を見ていて、彼の家が欄干をめぐるしような建物なのを知つて安吉は感心したことがあつた。中学生で水泳学校へ行つていたときの写真なんか写真帳にはあつた。見てみると、親たちが息子に気をつけて、

その成長にあわして辞典をえらんでやつたり、スポーツに興味を持たせてやつたりする層の家庭の雰囲気かみえてきた。その太田が、いつから家庭教師なんかをするようになったのだろう？ やはり彼も、焼け残りの法学部教室の地下で、学生共済部の例のカードに書き入れて雇い主を見つけたのだろうか？ しかし太田には、家庭教師で学資のおきないをつけているといつた貧しいところは相かわらずない。

「いや、ハウフの童話だよ。慶応の予科でネ。頭はちよつと悪いんだが……これだ。」といつて太田は薄つぺらな教科書を出した。

「じゃ、やるかナ？」

「頼むよ。向うへ通知しちまつたんだよ。あとからで悪いけど……それからネ。」といつて太田はまた笑顔をした。「金、月末でいいだろう？」

「金？……」と訊きかえしたがすぐ安吉にもわかつた、「いいよ。だけどいくらよこすんだい？」

「一回三円だ。いいだろうか？」

「いい。」と答えて「ほんとにいいナ……」と安吉は思つた。白山上の窪川という古本屋の棚の上の——多分あれはまだあるだろう。——一冊本の『ムンク』が彼の頭にきた。それを開いて、挿絵写真の説明がきを立ちよみして、それから正札に八円とあるのを見て交渉したがてんで引きそうになかつたいくつかのあれ。四円から五円は何とかして工面できるが、あとの四円か

三円がどうしても工面のアテのないあれ。それが、そんなところで、そんなことでできてしまったのだ……あれでみると、「悪魔派」だの「異端の画家」だのとだけでムンクを片づけるのはまちがっていやしないか？ あの鼻と——あんなのを、高木信夫が「マドロスパイプのような男らしい鼻」といつたのだ。——それから割れ目のあるようなあの顎と、あれが二十四のときの自画像なのだから、そんな男が神秘主義へ行つたなぞというのは故事つけといふべきだろう。クリスチアニアの街の風景があつて、画面前景隅の赤い少女の頭巾の色が印象に残るというようなことがその説明にあつた。そして、なるほどそこに少女の頭のようなものが認められた。何よりも、しまいへ行くにつれて出てくる変化の波が安吉を引いた。「仕事場からの帰り」といつたような絵がいくつもあり、体格こそちがえ、日本東京の夕暮れとすこしも情緒がちがわない。手足から肩へかけてが大きいだけ、背景が洋館づくりなだけ、東京の労働者よりもクリスチアニアの労働者の方がいつそうさびしげにさえ見えた。するとそこへ「逮捕された男」という素描が出てきた。一人の巡査が、のしかかつて一人の労働者の腕をつかんでいる。労働者は逃げようとしている。画面には一組しか出ていないが、群像の部分図の下書きといつたところにそれが見える。つまり大勢がおそろわれて、大勢が逮捕されて、それを画家が目で見たのだつたらう。それからクリスチアニア大学の壁面

の下絵が出てきた。そこでも労働と生活とが正面に出ている。何というちがいか！ 実物はまだ見ていないが、大講堂の小杉未醒の絵はともこんな風ではなかつたはずだ。でも、あれはどこでその写真を見たのだつたらう？ あすこでは、水がめを頭にのせた娘が肥えてみち足りた顔をしていた。ここでは、人相も構図も忍苦の表情で欠乏をうつたえている。そして、これこそが順直なプロセスなのだ。「異端」と見えたものはこへとたどつて行くのだ。そしてそのことが、いくらか甘やかし気味に彼自身のコースを肯定してくれたもののようにも彼に見えたのだつた……

「ごはん、もうないんでしようネ？」

ドタドタと降りて行つた太田とおばさんとの問答が下からきこえてきた。

「おひるあがらんとおつしやつてでしたから……」

「何かありますか？」

「クサヤがありますよ。」

「トロロコンブありませんか？」

「うツはつほ……」という声があがつてきて安吉も笑顔をした。それが、「トロロコンブを、わたしは、切らしておくもんですか……」とい

つた意味の笑い声だということを安吉は知つていた。おばさんのいけばん幸福な瞬間の笑い声……そんなときの彼女は、箇所をあげて、それ以上幸福に見えるのを遠慮するかのようにな手で口のハタを囲つてしまう。合宿のかれら

は青年らしくよく食つた。合宿としての会計は彼らを満足させなかつた。何を菜にして小屋を食うか？ 太田の発案でトロロコンブを具えることにして、何もいときは、トロロコンブを椀に入れて、鰹節と葱のきざんだのを入れて、それに塩と醤油を入れて熱湯をそそいだけであれらは二三杯も冷めしをかきこんだ。そのトロロコンブを、太田がいけばんによく食つてしよつちゆうトロロコンブ、トロロコンブという。おばさんが昆布の罐を出してきたらしく、太田が力まかせにかしつかしつと鰹節をかく音がする。安吉は、その音が音に似げなく牧歌的な思いにひき入れるのを不思議に思つた。あたりに物音のないせいの上、おばさんと太田とが、ものを食うといふことのために余念なく身を入れているのがわかるせいと安吉は解釈した。いつたいおばさんが、食事をつくつて青年たちに食わせるのを楽しんでる様子には、安吉を感動させるような何かがあつた。はじめ安吉は、佐伯哲夫が彼女の息子だということさえ知らずにいた。何かの研究会で、連中が「おばさん」といつて呼ぶこの人を、佐伯が「おつかさん……」と呼ぶのを見て彼ははじめてそれに気づいたのだつた。誰から聞いたとなしに知つたかぎりでは、彼女は若くて子供一人あつて後家になり、そのときを境に家産が全く傾いた。つまり、没落した。彼女は一人子を育てるためにいろいろさまざまに仕事口を見つけて働いた。息子を中学へやるために製糸工場へ行つて女工にもな